

右脳と左脳のバランスをのとり方を考える

村上春樹、柴田元幸著「翻訳夜話」文春新書(平成)を読む

- (1)「小説を書くのと翻訳するのとでは脳の中は全く逆の側が使われている感じがする。小説をずっと書いていると右側のこめかみの側を使っているなと感じる。だから小説を書き終わると翻訳が自然にしたくなる。つまり、今度は左のこめかみの側が使いたいなという感じが出てくる。それで、誰に頼まれたわけでもないけれど、自然に机に向かって翻訳をしちゃう傾向があります。そうしないとうまく自分の中でバランスがとれない。」 P15
- (2)「小説を書くというのは自我という装置を動かして物語りを作っていく作業です」ところが翻訳というのはテキストが必ず外部にある。」 P16
- (3)<翻訳について>「皆さんは誰でも自分の文体を持っている。僕の場合はそれはリズムなんです。呼吸を言い換えてもいいけれど、感じとしてはもう少し強いもの、つまりリズムですね。だからリズムということに関しては僕は場合によってはテキストを僕なりにわりと自由につかり変えます。長い文章があれば三つに区切ったり、三つに区切られている文章があったら一つにしたりとか。ここの文章とここの文章を入れ換えたりとか。
僕はオリジナルのテキストにある文章の呼吸、リズムのようなものを、表層的にはではなく、より深い視線なかたちで日本語に移し換えたい。それ以外のレトリックとかボキャブラリーとか、そういうことに関してはテキストに非常に忠実にやりたい。ここだけは譲れないと、でもあとはしっかり譲りますよと、そういうポイントを掴むといい。」 P19-20
- (4)「僕が小説を書いている時点では、書いているものは完全に僕という人間に所属しています。その間は作品に対しては何をしようと僕の自由だということです。煮ても焼いても構わない。しかし、書き終えた時点で、その小説は独立したものになる。つまり、僕の書いたものは独立したテキストとして世界中に出る。そのテキストにアクセスする資格は万人平等である。」 P29